

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟選

野葡萄や十年ぶりの高尾山

東京 徳原 伸吉

△評△外国人も多く訪れる高尾山。低い山だが久しぶりに歩くといい所だ。ノブドウの実に向ける視線がそう感じさせる。

櫓田や見果てぬ夢のある如く

熊谷市 根岸 曼平

△評△刈った後の株から伸びる青い稲。「見果てぬ夢」だと言われると徒労感が増す。

夜を刻む振り子時計や今日の月

横浜市 宮崎 一風

新蕎麦やみなスモホ見て並ぶ列

大阪市 福井 恬鈞

中秋や二階の窓に映る月

国立市 佐藤 建

槌やすめ帰燕を仰ぐ宮大工

名古屋 市 可知 豊親

秋冷の波に聴き入る影法師

龍ヶ崎 市 小宮 光司

新酒酌む我が青春の駿河台

古賀市 大野 兼司

刺繍の手止めて湯沸かす夜長かな

東京 あべゆう子

木犀や学園祭の帰り道

奈良市 荻野 隆子

西村 和子選

垂訓のごと教会の黒葡萄

弥富市 富田 範保

△評△ブドウ棚も場所によって違って見える。黒ブドウの重みや存在感が、説得力に満ちている。沈黙の力も伝わってくるようだ。

石あれば石に頼ひて秋遍路

津市 渡邊 健治

△評△路傍の石に腰を下ろしたお遍路さんは若くはなさそう。「秋遍路」のあわれも漂う。

手を合はすだけの信心今朝の秋

大阪市 福永 都女

ちやかほこと祭太鼓や隣村

日高市 佐藤 隆夫

松手入見上げて通るランドセル

茅ヶ崎 市 古田 哲弥

キーボード打つ手とまりし囀る声

北名古屋 市 月城 龍二

吉報が金木犀を抜けて来し

岡山市 沼野大統領

良き夢が降りて来さうな菊枕

河内長野 市 守口 幸子

カフェラテの仄かな苦味小鳥来る

紀の川市 竹中 俊和

肌寒や一つ寝床に姉妹

東京 福島 照子

井上 康明選

鉦叩汝が身のいつくよりの音か

小平市 中澤 清

△評△その声はあなたの身のどこからかと、女性に問いかけているかのよう。初秋に鳴くカネタタキの音は、せつなく澄んだ声である。

オリウの実を放哉の島に摘む

高松市 島田 章平

△評△海を背に、非日常の旅情豊かな風景。小豆島はオリウが探れ、俳人尾崎放哉の最期の地。

白秋や鼻梁うする野の仏

東京 望月 清彦

ゆく秋や嵩なき母の辺に眠る

東京 福島 照子

鮎落つる魚道にあまた水の階

弥富市 富田 範保

峰々の強き風あり稲架を解く

市川市 高野 厚夫

門口の白き花びら後の月

甲府市 清水 輝子

泣きじゃくる子の指ばった手放さず

我孫子市 桑原真喜子

行く秋や座席の硬き終電車

つくば市 小林 浦波

病院の待合室に冬日差し

東京 小栗しづゑ

片山由美子選

柿紅葉今日の日記は今日中に

平塚市 日下 光代

△評△翌日に延ばしてしまいがちな日記。その日のうちに書くことができたのは、柿紅葉の美しい気分の良い日だったからだろう。

もう聞けぬ兄の口笛鱗雲

久喜市 小林 通子

△評△最近兄を亡くしたのだろ。いわし雲の広がる空は郷愁を誘い、人恋しさをかきたてる。

釣客を降ろす漁船や冬隣

中間市 恵 英次郎

今かいまかと蓮の実の飛ぶを待つ

千葉市 吉川美恵子

山茶花や下校の子らの話し声

米子市 岩水 節子

停戦のガザに広がるいわし雲

高松市 島田 章平

色変へぬ松この家と共にあり

豊田市 内山 幸子

音のせめ夫婦の暮し屋ちろ

横浜市 菅沼 葉一

白壁に濃き影落す夕紅葉

奈良 高尾山 昭

鶴折りて息を吹きこむ夜寒かな

奈良市 奥田 誠

調べの鼓動

俳句と国際交流

星野高士

こうやって書いている時にも日本のどこかで俳句会をやっていると思う。北海道から九州、沖縄と少しずつ季節感の違いが、一体どれくらい俳句が生まれているかは想像に絶する。

また海外の俳句人口は100万人とも言われ、今年から国際俳句協会の会長をしている私も遠くはブラジル、近くは韓国といろんなところで句会をやり、現地の方々とも交流してきた。

俳句を通じた国際交流の一つに、日本とスペインをつなぐ「ハボン支倉常長俳句賞」がある。この賞は、伊達政宗の家臣の常長率いる慶長遣欧使節団が宮城県石巻市を出発してから400年となる2013年、文部大臣をつとめた有馬朗人氏を中心に創設された。ハボンはスペイン語で日本の意味。常長一行が滞在したスペイン南部のコリア・デル・リオにはハボンの姓を持つ人が今も多く住み、東日本大震災で被災地に励ましの俳句が送られたのがきっかけだった。

23年の第4回では、日本語一般の部の大賞に高井せつさん（東京都）の「支倉を護る常隆冬の星」が選ばれた。またスペイン語の部は大賞にジュリアナ・ローさん（スペイン）の「父慕い遠くへ近い夢灯籠」、支倉家特別賞にフェルナンド・プラテロさん（同）の「盆の月希望の灯籠石巻」（いずれも邦訳）が決まった。東日本大震災から15年となる来年には第5回の受賞作が発表される。

海外俳句は日本の定型とは違つが、季節（季語）の扱いなど日本の誇る俳句は世界でも活躍しているのである。

（ほしの・たかし 俳人）